

---

# 夜空の向こうへ

木村琴梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜空の向こうへ

### 【著者名】

Z0873D

### 【作者名】

木村琴梨

### 【あらすじ】

小さい頃から仲良しだった兄妹。兄の妹への気持ちは恋に変わり……。禁忌を犯す。近親相姦……。兄の思いは伝わるのでしょうか……。

\* 視線\*

最初はただ見ているだけでよかつた。  
よかつたのに…。

いつからだらうか妹で抜く様になつたのは…。  
そのたびに俺は妹を汚している。

わかつてゐる。

わかつてゐるけど…

俺は妹に恋をしてゐる。

しかし妹の視線が俺に注がれる事はもうないだらう。俺は過ちを犯した。

どうしても押さえられなかつたんだ!!

俺は世界でたつた一人の妹を最愛の人を犯してしまつたんだ……。

歯止めが効かなかつた。

奈緒の泣き顔を見ても辞めてやれなかつた…。  
むしろさらに欲情した。

大切な大切な妹だつたのに…。

その日を境に奈緒の視線が俺に注がれる事は無くなつた……。

『自業自得』

そうかもしれない…。

でもこうでもしなきや奈緒は他の男のものになつていただろ?  
耐えられなかつた…。

俺はこんなにも奈緒が好きなのにどうして妹というだけで諦めなければならぬのだろう。  
最愛の人が妹だった…。

ただそれだけなのに……。

許されることのない恋だってわかつてたよ。

でも妹の視線がアイツに向いた時胸をナイフでえぐられた様に痛か  
つたんだ。

小さい時。

俺達は本当に仲が良かつた。

泣き虫な奈緒を3つ年上の俺は泣き止むまで頭を撫でて一緒にいて  
やつたんだ。転んでビービー赤ん坊の様に泣く奈緒を家まで負んぶ  
して帰つたこともあつたつけ。

いつも俺がいないとなんも出来ない奈緒を見て俺は可愛いと思つた  
んだ。

奈緒の事は俺が一番知つてる。

アイツなんか奈緒の事もなにも知らないくせに……。

違う！

怖かったんだ。

奈緒を取られる気がして。奈緒は俺の妹でそれは揺るぎない真実で  
…認めるのが怖かった。

兄ぢや奈緒を手には入れられないから。

神様…せめて俺が兄ぢやなかつたら奈緒が妹ぢやなかつたらこんな  
に罪悪感に見回れる事は無かつたと思ってもいいですか？

この後ろめたさが少しでも薄らいでいたと思ってもいいですか？

今日も奈緒の視線を得る事は出来なかつた。

もう兄としても失望されてしまつているだろ？

俺は奈緒を忘れるために女を抱いた…。

何人もの女を抱いた。

抱いても抱いても満たされない心。

抱いても抱いても満たされない体。

この体が心が欲しているのは…奈緒。お前だけだよ。お前の目に写

つっていたのは兄の俺で、分からしてやりたかったんだ。  
俺も奈緒。お前の事を愛している男の一人なんだと。

ごめん。

もう遅いけど、謝って済む事でもないけれど、奈緒。好きになつて

ごめんな。

## \* 傀食される体\*

時間が経つのはどうしてこんなにも速いのだろうか。奈緒に避けられる様になつてから半年が経つた……。

この頃体調がすぐれない。特にタバコを吸つてる訳でもないのに少しの運動で息があがる。

体力には自信があつたのにすぐバテてしまつ……。  
加えて吐き気。

舌に白い斑点の様なものも出てきた……。

風邪だと思い市販の風邪薬を服用するが効果はない。『今度病院行つてみるか』

と思つていた矢先の事だった。

体育でバスケの試合をしていた時。

それは突然やつてきた。

体が動かなくなりその場にグッタリと倒れこんでしまつたのだ。  
だんだんと意識が朦朧とし、途絶えた……。

「……。」

白い天井、白い壁。

目が覚めた時には病院だった。

体育の川島先生が救急車を呼んだらしい。

意識がまだはつきりとしない……。

視界がぼやける。

「……光輝？」

意識がはつきりしてきた。視界もだんだんとピントがあつってきた。  
母さんが心配した顔で俺を呼ぶ。

「母さん……心配かけてワリイ。」

母さんの様子がなんだかいつもと違つた。

母さんのこんな顔を見たのは初めてだつた。

怒ると恐いけどいつも笑っている母さんが今日は悲しそうな今にも涙が零れだしてきそうな切ない顔をしていた……。

「どうしたんだよ！？」

母さんは顔をうつむかせてしまった。

肩が微妙に震えていた。

「母さん？」

母さんは顔をうつむけたまま何も言わない。  
父さんが母さんの肩に手をかける……。

「…………お前は……エイズだ……。」

父さんは真剣な顔で静かににそう言った……。

誰も何も喋らない。

『俺がエイズ？』

『誰か何か言つてくれよ！――』

『なんで皆黙つてんだよ！――』

俺は心の中で問い合わせた。

『エイズ』

きつかけはあるの田……。

最愛の妹を犯したあの時……。

妹はHIV感染者だった。

昨日肺炎を起こして入院したらしい。

「奈緒は？……死ぬの？」

俺の命なんかいい。  
でも奈緒は違う。

神様……奈緒を妹を愛したのは俺です。

過ちを犯したのは俺です。罰を受けるのは俺だけでいい……。

奈緒も罪人というなら俺が奈緒の分まで受けるから……お願いです。

神様……奈緒を助けてください。

「……。」

何も言わずにつつむく両親。

涙は枯れることを知らず流れ落ちる……。

体が言つことを聞かない。吐き気は増し。  
咳は止まらず声が枯れてきた……。

「奈緒に……会いたい。」

車椅子に乗せられ俺は奈緒の元へと向かう。

途中鏡に映つた俺を見た。あんなにがつしりしていた体は痩せ細り骨ばつていた……。

『情けねえ……。』

俺は心の中で呟いた。

奈緒のいる病室に着く。

手袋をはめウイルスが病室に入らない様身なりを徹底する。病室に入る。

ベッドの周りに機械が沢山。

奈緒の腕からは点滴の管が何本も見えた……。

奈緒は注射が嫌いだ。

予防接種をする時も怖いって泣きながら俺の腕にしがみついていた。……痛かったよな。

奈緒の手を見る……。

痩せ細り骨の感触が直に伝わる……。

『『めんな……。』』

目からは涙が流れ落ちる。

「お……兄ち……やん?」

奈緒の手。

握り締めていた手。

弱々しくだがちやんと握り返してくれた。

そして…半年ぶりに俺の目を見つめてくれた。

「お…兄…ちやん…！」

え？

「「め…ん…ね…」」

奈緒が謝っている。

奈緒は何も悪くない。

奈緒は何もしていない。

過ちを犯したのは俺なんだよ！？

なのに奈緒が泣きながら謝っている…。

奈緒は悪くない。

咎められるの俺だ。

だから謝るなよ。

神様：奈緒は何をしたんですか？

奈緒は何もしてない。

奈緒は咎められる何かも後ろめたくなる何かも持っていない。

神様：奈緒を解放して下さい。

## \*死期\*

「私……お兄ちゃんの事……す……き。」

奈緒の瞳からは一つの涙が頬伝い流れ落ちた。

俺の瞳からも一筋の涙が頬を伝つ。

神様：俺は今本当に幸せです。  
ずっと望んでた言葉。

夢なら覚めないでほしい……。

「俺も……奈緒がずっと好きだつたよ……。今も昔も……。」

俺達は手を握り締めた。

離れないようにギュッと……。

もう離さないよ。

この身が朽ち果て滅びようとも俺は離さない。

しかし俺達の命のカウントダウンはもう始まつていた……。

人間の心臓は生まれたときから死ぬまでに何回打つか決まつていて。こうしている今も俺の心臓は人生の最終章へと時を進めていくのだ。この心臓は明日止まつてしまふかも知れない。  
でも俺が生きた日は無駄では無かつただらう。愛する人がいて。

それは許されることのない愛だけ、互いに愛し合つことが出来た。  
今奈緒の瞳は俺のもの。

奈緒の心も体も…全て…。これ以上に望む事があるだらうか…。

父さん母さん。

俺を産んでくれてありがとう。

奈緒を産んでくれてありがとう。

父さん母さん。

あなた達の愛の結晶はまた新しい結晶を作りました…。

この結晶は永遠に壊れる事はないでしょう…。

父さん母さん。

あなた達は俺達のこの恋を愛だと認めてくれますか?…たとえこの命が今滅びようとも俺は構わない。

せまりくる死に俺は恐れることはない。

もし俺が先に死んだら奈緒が死ぬその日まで待とう。あの世に逝つても俺達はずつと一緒にいよう。

神の怒りも一人なら怖くはない。

わづか…何も思い残す事はない。

いつまでも一緒に。  
一緒に死を待とう……。

\*月夜の中で\*

この一年間色々な事があった…。

生まれて初めてした恋。

妹だったけど俺の心は確かに揺れたんだ。

初めて抱いたあの日…。

無理矢理してしまったけど満たされた体…。

あの時はまだ奈緒が俺の事好きでいてくれたなんて知らなかつたら心に虚しさだけが残つていたよ。

エイズと申告されたあの日…。

正直怖くなつた。

最初はね?

でも奈緒も俺を好きでいてくれたつて知つて死を恐れる事はなくなつたよ…。

奈緒の見つめる瞳がこんなに綺麗だった事…覚えていたよ。  
俺の大切な思い人…。

奈緒は今俺があの日奈緒を抱かなければ俺は苦しまなかつた……。そう思つてゐるだる。

でもあの日俺がお前を抱いていなかつたらこんなに幸せな想いは感じなかつたと思つ。

俺は奈緒をあの日抱いたこと悔やんではいないよ？

奈緒の体温。

いまでも覚えてる。

奈緒の泣き顔も可愛かつたけど奈緒はやっぱ笑つていてよ……。

「行こう！――」

俺達は走りだした。

病院を抜け出し外に出る。裸足で地面を蹴る。

懇親の力を足にこめ走る。

野原に出た。

目の前には小川がチヨロチヨロと流れている。

一面に咲く白つめ草。

俺達はそこに身を投げ横になる。

見つめ合つ二人。

夜風が気持ちいい。

俺は長めの白つめ草を一本抜いた。

「奈緒小指出して。」

奈緒は小指をちょこんと立て俺に差し出してきた。

俺も小指を出し奈緒の指に絡める……。

そして絡めた一本の小指を白つめ草で結んだ……。

「俺達は永遠の恋人。」

目を閉じる。

俺達は輝く星達に見守られるなか夜空へと舞い上がった……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0873d/>

---

夜空の向こうへ

2010年11月20日03時00分発行